

徳富蘇峰を知っていますか？

日曜日の夜の楽しみにNHK大河ドラマ『八重の桜』がある。現在、物語は会津戦争が終わり、舞台を京都に移して、明治の時代を生きる八重を描いている。八重の夫である新島襄(1843年-1890年)が開校した同志社英学校(後の同志社大学)に転入学してきた人物に徳富蘇峰がいる。

徳富蘇峰は明治時代に国民新聞を創刊した新聞記者で言論人、歴史家で戦前の言論界に大きな影響を与えた。その蘇峰は静岡と縁が深い。特に静岡新聞の創設者大石光之助は、蘇峰の門下生であり、昭和16年、一県一紙の新聞統合によって静岡新聞が発足すると社長に就任した。その関係でジャーナリストであり稀有な文化人でもあった蘇峰の精神を継承普及することを目的に設立された「蘇峰会」が、現在も静岡新聞放送会館にある。また、熱海市来宮神社には、昭和32年(1957)、熱海で95歳の天寿をまっとうした『徳富蘇峰(とくとみそほう)』の業績を顕彰して立てられた碑もある。

しかし、こうした歴史の事実を静岡県民はどのくらい知っているだろうか？
しかも、今年は蘇峰生誕150年というのに県民の関心は薄い。

「日本平」山頂に設けられた展望台を「吟望台」(ぎんぼうだい)と呼ぶのをご存知か？吟望台と聞いて？？？となった方もいらっしゃるかと思う。

清水から車で日本平に登る道は二つある。日本平パークウェイとサッカー場の横を登ってゆく登山道である。サッカー場からの登山道は、昭和7年に失業対策事業として着工された道路だ。完成は昭和10年2月。頂上に至るまでに四つの展望台が造られた。蘇峰に依頼し、望岳台(ぼうがくだい)、吟望台(ぎんぼうだい)、鐘秀台(しょうしゅうだい)、超然台(ちょうねんだい)と命名されたという。

昔はこの吟望台周辺にはお店があり、雄大な景色を眺めながら一服できたものだが、現在ではすっかり姿を消している。この吟望台周辺のみならず、植栽や遊歩道の整備状況など、この「日本平」の管理状態は非常に悪く、観光地としての魅力が半減していることは否めない。

何事も変わり果てたる世の中に 昔ながらの富士の神山 徳富蘇峰

富士山の世界文化遺産の登録を機に、こうした地元の歴史遺産にもう一度光を当てていきたいと思う。

静岡県議会議員
天の一